



他社管理物件のスプリンクラー誤作動事故について

今回のトピックス

9月・10月と他社の管理物件において、消火用スプリンクラー誤作動の大きな事故がありましたので、情報共有いたします。
本件、対岸の火事と考えず年末に向け、今一度気を引き締め、事故防止の参考としてください。

ケース.1：静岡県裾野市の市民文化センター

2022年9月24日（日）13：00頃

大ホールの舞台上にあるスプリンクラーが突然作動し、ステージと舞台袖に水が降り注いだ。午後2時に自主文化公演「オーケストラを聴こう！」の開演を予定していたため、室内オーケストラの機材にも水がかかった。また、演奏者5人が水により転倒するなどして怪我を負った。

◎想定原因

現時点において明確な原因は不明ですが、当ビルのスプリンクラーは開放型スプリンクラー設備（設備詳細は3ページに記載）の可能性があり、人為的に操作盤を操作した可能性等も考えられます。

ケース.2：横浜みなとみらいホール

2022年10月17日（月）11：00頃

大ホールの天井照明テストを行っていたところ、天井裏にある照明室内のスプリンクラーが作動し、照明室内に水があふれ、天井裏・ホール1階の客席の一部に大量の水がかかった。また、人的被害はないが、当施設のリニューアルオープンイベントが中止となるなどの施設運営に対する損害が出た。

◎想定原因

現時点において明確な原因は不明ですが、当日テストしていた、スポットライトの熱を湿式スプリンクラー設備が感知して作動した可能性が考えられます。

日常的に意識が必要なこと

◎設備機器に違和感を覚えた場合は速やかに報告すること

⇒設備機器にいつもと異なる違和感（いつもと違う感覚）を覚えたら細かいことでも物件担当者に報告しましょう。

些細な不具合が大きな事故に発展する可能性があります。

◎設備機器の操作や仕組みを理解すること

⇒現場設備において、操作方法や仕組み（他設備との関連含め）の理解が不完全な場合は、何となく日々の設備機器の運転を行わず物件担当者を経由しエンジニアリング部門等に確認し、設備の理解を深めましょう。

また、判断に困った際は独断で対応せず、関係者と連携の上で対処しましょう。

特に緊急時には焦りもあり、的確な設備操作が出来ず事故やクレームに発展してしまう可能性があります。

◎設備点検時の指摘事項を放置しないこと

⇒点検の指摘事項は確実に顧客に改修提案をすることが必要です。

改修提案を行わずに事故に発展した場合は損害賠償を請求される可能性もあります。



設備点検指摘事項の改修提案進捗は職場ミーティング等で必ず物件担当者と確認、共有しましょう！

「あの時、こうしてればこんな事故にならなかった・・・」
など後悔しないよう、常に危機意識を持って業務を行うことが大切です。



開放型スプリンクラー設備とは

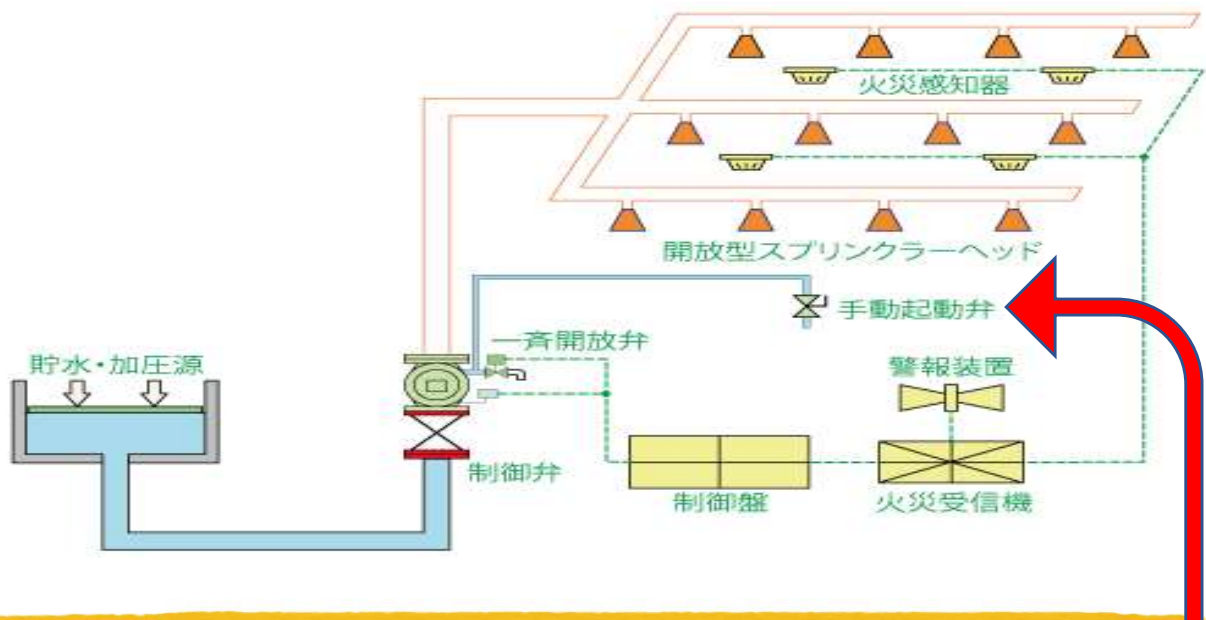
開放型スプリンクラーヘッドを用いるスプリンクラー設備は劇場などの舞台部や化学工場、倉庫など、急速に火災が成長・拡大する可燃物が存在する対象物に用いられるスプリンクラー設備です。

開放型スプリンクラーヘッドと別に、防護する対象区域に煙あるいは炎を検出する火災感知器を設けます。また、放水区域ごとに手動起動弁を設けます。

貯水・加圧源から一斉開放弁までの配管は常時加圧充水されており、一斉開放弁から開放型スプリンクラーヘッドまでは空配管となっています。

火災時、火災感知器が作動するとそれらの信号により該当する区域の一斉開放弁が開き、開放型スプリンクラーヘッドより一斉に放水されます。制御盤または手動起動弁の手動操作によっても設備を起動できます。

火災地域に対し一斉に放水しますので燃烧速度の早い対象物にも有効な冷却と消火効果が期待できます。



毎日の巡回時に手動起動弁の封印は必ず確認しましょう！



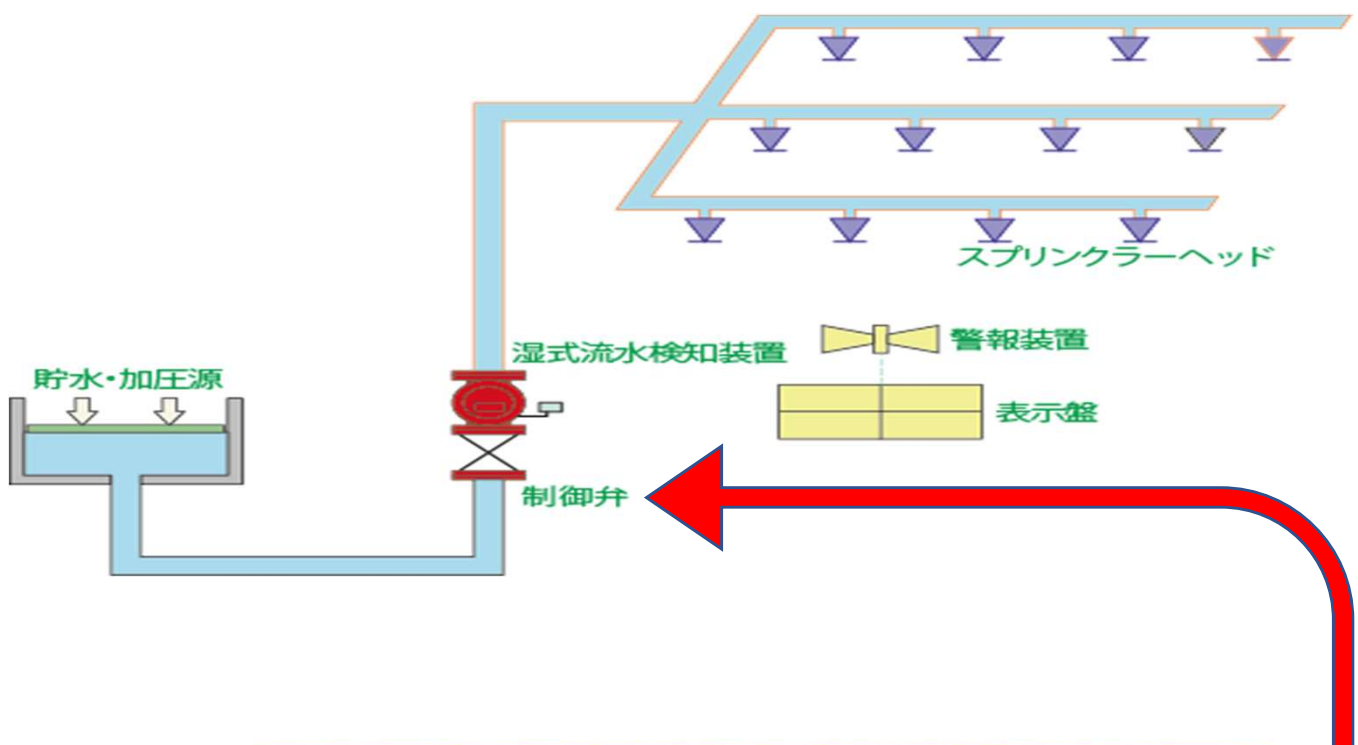
湿式スプリンクラー設備とは

湿式スプリンクラー設備は広く一般的に用いられるスプリンクラー設備で、天井高さが10m以下（物販用途は6m以下）の部分に設けることができます。

貯水・加圧源から末端のスプリンクラーヘッドまでの配管内は常に充水・加圧されています。

スプリンクラーヘッドは、ペンダント型（下向き型）やアップライト型（上向き型）などが用いられます。
火災時の熱によりスプリンクラーヘッドが作動すると、直ちにヘッドから放水されます。

ヘッドからの放水に伴って湿式流水検知装置が開くと表示・警報装置が作動します。



毎日の巡回時に制御弁の圧力ゲージに異常がないか必ず確認しましょう！

